

「和独対訳辞林」について

坂本, 浩一
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/11996>

出版情報 : 語文研究. 60, pp.40-51, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「和独対訳辞林」について

坂 本 浩 一

一 はじめに

幕末から明治初期にかけて、わが国語語彙は大きな変動期を迎えた。この時期の語彙を多く収集した資料として、当時の外国語対訳辞書が挙げられる。なかでも「和英語林集成」の重宝なことは、既に指摘も多く、それに基づいた研究成果も挙げられている。

ここに取り上げる「和独対訳辞林」については、その成立上の特殊な性格——すなわち「和英語林集成」を模倣し、かつそのⅡ版とⅢ版のちょうど中間の時期に刊行されたという——から、その国語資料としての有効性が指摘されながら、未だその総合的・包括的な調査研究は施されていない。

そこで、本書の国語研究上の有用性と、本格的な研究資料として扱うための見通しとを今回探って見ることにした。

二 「和独対訳辞林」の成立

「和独対訳辞林」(以下「和独」と略す)は、日本人三人¹ 齊田訥於・那波大吉・国司平土²の著述及び独逸人律多留³富勒曼⁴の校定によ

り、明治十年に刊行されている。本書の解題は国語学研究事典(八四一頁・飛田良文氏執筆)他に詳しいので、省略にまかせる。

著述者が独逸語の序文を付している。その中から、以下の考察に關わる主要な点を要約列挙すれば、次のようになる。

① 学生がドイツ語で文章を書く為の手助けとしたい。

② 日本人が編集をし、レーマンは校閲を行った。

③ ヘボンの辞書が良いので、それを手本とした。

④ 手もとにある幾つかの独和辞書を利用した。

⑤ 何人かの著名な日本の教育家の忠告を参考として、見出しはイロハ順配列にした。

⑥ 現在、何冊かの独和辞書が出版されているが、それらは不完全であったり、両国の類義の語がただ実例なしに切り詰めて配置されている。

⑦ 本書では必要と思われる多くの箇所、例文を示すことよって単語の用法を説明した。

つまり、「和独」には、日本語を学ぶ独逸人学生が日本語の単語の意味を知る為⁵に引く、というよりはむしろ、日本人学生が独作文を

する為の参考文例集とする目的意識が第一義のものとして存した(①) ようである。又、④に言う利用した和独辞書の追求・特定の作業は、当然今後の検討を俟つ重要な課題であるが、筆者は先ず「和英語林集成」(以下「和英」と略す)との関係(③)を明らかにすることこそが急務であると考え、今回は後者に考察を絞ることとした。

そして、以下の考察中でも触れる所があるが、⑥・⑦から察せられる本書の用例第一主義についても看過出来ないものがあるのである。このことは、まさに開化の気運に乗った実用重視の時流を反映したものと考えられる一方、そこに基盤を得て出現する言語の性格に於いて、編者の背景にもつ日常的・実用的な言葉の反映される余が充分にあると思われるのである。

もちろん、序文に書かれてある事柄をそのままに事実とし承認するのは早計に過ぎよう。しかしながら、このように本書の成立事情を見てくるならば、その言語資料としての価値に於いて、当期の「和英」と同等の高さを予想することが全く不合理であるとは思えない。そして同時に又、本書が意図して手本としたという言明がある以上、その言語研究の手続きとして、最初に「和英」との突き合わせを行ってみることは、必要かつ妥当な要件であると考えられるのである。

今回の考察に於いて、先ず基本的に「和独」を「和英」の系列中に恰もⅡ版・Ⅲ版の中間版であるかのように扱うのは、右の考えに基づき、その範囲内での調査検討と認識するからである。

三 「和英」との比較

それでは、本稿の眼目となる「和独」―「和英」の比較検討に入るが、両資料でのローマ字つづり方式の違いについては立論に差し支えない範囲で無視することとする。又、先述のように、「和独」でイロハ順に並ぶ見出し項を「和英」でのABC順のそれに一々対照させてゆくという作業上の都合から、今回到底全部の調査には及ばず、主としてア(A)の部に限っての調査検討を行うことにした。アの部を選定したのは、「和独」では全六十七部中五十二番目の部であり項目数もまず妥当な量を有することで、全体を見通す上で充分であると判断したからである。

三―一 見出し部の調査

「和独」の一項目は、「和英」の形式を踏襲し、ローマ字見出し・カナ見出し・(漢字表示)・(注記)・品詞・独逸語説明・(日本語例文―対訳独逸文)・(同義語)から成る。()を付けたものは各項目で存しない場合があるものである。

三―一―一 見出し語項目について
最初に「和独」の全収載見出し語数について数取りを行った結果を示すと、左のとおりである。

イ	九八三	ロ	一一二	ハ	七六八
バ	一七二	パ	一一二	ニ	二七六
ホ	三八二	ポ	一一九	ボ	一四
ヘ	一五八	ベ	六六	ペ	一一
ト	五八六	ド	二一六	チ	四五六
ヂ	五〇七	リ	二二六	ヌ	一一九
ル	三三七	ヲ	九〇二	ワ	二二七

カ…一六六ガ…九八 ヨ…四四七
 タ…六九九 ダ…一九六 レ…一一八
 ソ…三九八 ゾ…八二 ツ…五三〇
 ノ…二九八 子…二九九 ナ…五三八
 ヲ…六八 ム…二九四 ウ…六三一
 ラ…一一五 ク…六六一 グ…一〇四
 ノ…三三九 マ…五二七 ケ…三二三
 ヤ…三七六 フ…五四三 ブ…一八九
 ゲ…一〇七 コ…八四四 ゴ…一七〇
 プ…二 エ…二二四 テ…三四八 デ…一一三
 ア…一〇〇 サ…七八六 ザ…一〇三
 キ…七八〇 ギ…九六 ユ…二五〇
 メ…二四二 ミ…五二五 シ…一四六〇
 ヒ…七三四 ビ…八〇 ピ…七
 モ…三七八 セ…五三五 ゼ…九九
 ス…四四三 以上合計二四、三六八

このように、全体をイロハ順六十七の部に分けて、総計二四、三六八語を収載している。これらを、ABC順に整理し直しかつ「和英」のデータと比較し易いように示すと、下の表が得られる。

	和英 I	和英 II	和独	和英 III
A	807	955	1001	1536
B	527	623	636	828
C	359	441	* 一	725
D	466	554	* 1384	* 686
E	* 一	* 一	* 一	* 328
F	439	494	543	827
G	399	504	575	753
H	1721	1929	2042	2918
I	863	938	983	1440
J	408	474	* 一	804
K	3237	3545	3864	6221
L	1773	1879	1966	2690
M	1227	1345	1421	1959
N	801	881	902	1250
O	26	32	37	57
P	559	592	618	948
Q	3148	3383	3622	5069
R	1884	2069	* 2619	3353
S	532	599	631	919
T	237	233	227	338
U	* 1124	* 1222	* 1297	* 1483
V	236	257	* 一	* 486
W	20772	22949	24368	35618
X				
Y				
Z				
計				

けれども、「和独」は「和英」をそのままに模倣したに過ぎない、といった見方があるならば、この増補語数一四一九についてはやはり「和独」の意欲的な傾向を認識する必要が生じよう。

また、一口にイロハ順に並べたといっても、「和独」では単に見出し語の頭音節のみを揃えたのではない。第二音節以下の全音節に互り、しかも新たに増補した語も含めての全面的な配置組み換えを行っているのである。さらに、後で触れるような各項目における細部の異同までを勘案するならば、「和独」を「和英」の転写物として見るような立場は、これまた取り難い。

その形式と内容の大体が、「和英」の明らかな影響下にあることは

厳然たる事実として受け入れねばならない。しかしながら、「和独」に於ける積極的意欲的な部分の認められる所では、それなりの意義と価値とを見出すのに疎むことのない態度こそ、公平であり科学的な対処の仕方であると考へる。

量的な比較検討のみでは客観的論証が得難い。より詳しく「和独」語彙の性質を把むには、さらに細かな「和英」との比較対照を行う必要がある。そこで、「和独」からAの部一〇〇一項目について、「和英」I・II・III版との照合を試みると、次の結果を得る。

	和英I版	和英II版	和独	和英III版	項目数 見出し
(イ)	○	○	○	○	七六〇 (75・9%)
(ロ)	○	○	○	×	一九 (1・9%)
(ハ)	×	○	○	○	一四一 (14・1%)
(ニ)	×	○	○	×	九 (0・9%)
(ホ)	○	×	○	○	〇 (0・0%)
(ヘ)	○	×	○	×	二 (0・2%)
(ト)	×	×	○	○	一一 (1・2%)
(チ)	×	×	○	×	五八 (5・8%)
合計	一〇〇一	一〇〇一	一〇〇一	一〇〇一	100 (100・0%)

(イ)(ロ)(ハ)は「和独」収載語のうち「和英」II版と一致するパターンを示しているが、この四型で一〇〇一語中の九二九語(92・8%)を占める。特に、(イ)(ロ)型は合わせて一五〇語に上り、(ホ)(ヘ)型と比較するならば、先の序文の要約③にある「和独」編者の利用した「へ

ボンの辞書」とは、「和英」のII版を指すことが明らかとなる。もちろん、これは「和英」I版の併用を否定し去るものではない。ともかく語彙収載の上では、II版から現われるものを「和独」が吸い取っている様相は窺えるのである。

但し、この表は「和独」収載語の側から見たものであり、逆に「和英」の側からも当然検討が成されねばならない。そこで、「和英」II版Aの部収載語九五五語から、「和独」に受け継がれなかったものがどれだけ在るのか調べて見た所、次のものが挙げられた。

- 。アバケル、アプミハク(アプミクハの誤)、*アドケナク、アイビ、アヒツ、アイレン、アイサウズカス、アイサウラシク、アイタツ、アヂサイ、アカンベイ、アカンボウ、アカメアフ、アマレル、アマヤドリ、アマエ、アンゴリ、アンズル、アンナイジャウ、アラガフ、アラン、アラタマル、アリカギリ、アリノトワタリ、アツサリト、アテハメル、アハヤカ、アザミ

以上の二八語である。つまり、九五五語のうち「和独」に採られなかったものは、2・9%であったことになる。この値については、Aの部という限定内のことであり全体の調査を見るまでは何とも推断し難いが、ここにもやはり「和独」に部分的ではあるが主体的な選択があったことを認める立場がありえるのではなからうか。新語形の増補を積極的な主体性の発露と見る一方、この二十八語の中にもアカンベイ・アンゴリ等に限っては、編者の側に不採用と決すだけの、いわば消極的な主体性が存したと考へることも出来よう。

各型別に、具体的な例を挙げながらさらに検討を進めてみよう。(イ)型が大勢を占めるのは、「和独」の成立から当然の帰結であり、ここに挙例の繁は避けることとする。そこで問題となってくるの

は、では「和英」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ版に収載されながら「和独」に採られなかったものはどういうものか、ということであろう。先の二十八語中、右肩に○をつけた十三語がそれにあたる。採用されなかった背景に、各語の消長を見るのは、若干無理があるう。やはりその因は、「和独」の編集態度にあると見るべきか。それを偶生的なものとするか、意図的なものとするかは、俄かに判断し難い所である。

(ロ)は、Ⅰ版・Ⅱ版・「和独」と辞書に載りながら、「和英」Ⅲ版で廃されたもので、

アイボレル、アット、アチナク、アガリサガリ、アダニ、アダナ(婀娜)、アダナ(虚・空)、アダヤカナ、アツマヤ、アマ子ク、アゲクノハテニ、アブラギル、アキイへ、アキチ、アキダナ(空店)等である。これに対し、「和英」の側から見ると、Ⅰ版・Ⅱ版に存して「和独」・Ⅲ版と廃されたのは、先の二十八語中、*印の

アドケナク、アイサウラシク、

の二語である。(ロ)に於いてはその語自体の消長を考える手掛かりとなるものを含むが、この二語は形容詞アドケナイ、アイサウラシイの一活用形として辞書的処理を施したものである。アドケナイ・アイサウラシイとともにⅠ版・Ⅱ版・「和独」・Ⅲ版を通じての収載語であるから、「和独」はⅢ版に先行して、見出し項目の統合を主体的に行つたことになる。もっとも、「和独」のこうした例はそう多くはないようで、Aの部を見た限りでも割に不統合な項目が目につく。ただ、こうした中であればこそ、かえって注目出来る箇所と考えるのである。

(ハ)・(ニ)ともに「和英」Ⅰ・Ⅱ版・「和独」が×○○型をとるもので、合わせて二五〇語となる。これに対して、「和英」の側から×

○○型となるものが、先の二十八語中・印の一三語である。双方を足した一六三語が、即ち「和英」Ⅰ版からⅡ版への増補語ということになるが、そのうちの二五〇語(92・0%)と大半がそのまま「和独」にも収載されている。ところが、「和英」Ⅰ・Ⅱ版と「和独」との収載に関して、

○○型の「和独」不収載率15-792 \parallel 1・9%

×○○型の「和独」不収載率13-163 \parallel 8・0%

と整理してみれば、×○○型に於ける不収載率の高さが目につく。これは、「和英」Ⅱ版で増補された語の性格を考える上で、興味深いものを投げかけるのである。つまり、少なくとも同系であるには違いない辞書間で、こうした収載のユレを示す語は、それだけ辞書編者の収載判断の境にあるような、当時そうした性格をもったレベルの語であったことが、窺われるのではなからうか。「和独」——「和英」の語彙対照調査の有効性・意義は、こうした認識の上に立つことで、一層増すものと思われる。

(ホ)は先述の如く、「和独」の見出し項目が「和英」Ⅱ版に拠るものであることの傍証となる。(ハ)はアヘナク、アリギリの二語。

(ト)・(チ)は、「和独」が主體的に独自の増補を行ったものであり、特に重視してみたい所である。まず(ト)についてみると、次の二二語が挙げられる。

アイボレ(相惚)、アイソ(哀訴)、アトオサヒ(後押(後驅))、アツチ(彼地)、アツチコツチ(漢字表示ナシ)、アマガイル(青蛙)、ウチノリ(青海苔)、アソビメ(遊女)、アクト(悪徒)、

アゲモノ(揚物)、アビキ(綱引)、アンキ(暗記)

さすがに、俗語形・漢語が目立つようである。(ト)は「和独」増補

語七〇語中の一二語である。「和英」Ⅲ版は、Ⅱ版に比べ数多くの一般語を増補した。Aの部に於けるその増補語数は五八一語に上るのである。「和英」Ⅲ版の大幅な増補語の中に、「和独」に於ける増補語のうち(D)のように一致するものが出て来ることは、極く自然なことのように思われる。しかし、それでは一方、七〇語中五八語(82・9%)までが一致していないということは、つまりどうということなのであろうか。(F)の語例を実際に検討してみよう。

アイ、ロ(藍色)、アヒジャウ(逢状)、アイガミ(藍紙)、アイサウツカシ(無愛想)、アイアイ、アトニジリ(後轍(逡巡))、アトシザル(退却)、アリアイ(有(色)、アヲタ、アヲムキニ(仰向)、アヲノキニ(仰向)、アヲウミ(蒼海)、アハセル(令逢逢)、アカイタ(銅板)、アカガイル(赤蛙)、アカガ子ザイク(銅細工)、アタマハゲ(櫛)、アタヘ(代償)、アソビランナ(遊女)、アソビツキ(遊好)、アツカハ(厚皮)、アネサマ(姉様)、アナカンムリ(穴冠)、アライチン(洗賃)、アライキヨメル(洗清)、アラレタマ(散弾)、アクバ(悪婆)、アクメイ(悪色)、アクシン(悪心)、アクヒヤウ(惡評)、アクセツ(惡説)、アヤツリニンギョ(機関人形)、アマヲブネ(海士小舟(漁舟))、アマガイル(雨蛙)、アマタリ(雨滴)、アマタレ(雨滴(雨留))、アマノカハ(天河(銀河))、アマヤミ(雨休)、アケツバナシ(明離)、アゲドウフ(揚豆腐)、アヘル(落)、アヘル(得逢)、アヘギアヘギ(喘々)、アテツケ(當付)、アサハカ(浅塞)、アサネバウ(朝寝坊)、アサマシク(浅猿)、アザナフ(糶)、アザムキトル(欺取)、アキラカナ(明)、アキウド(商人)、アユミヨル(歩寄) アモ(餅)、アセジバン(汗襦袢)、アスニチ(翌日)、アンヅルニ(案)、アンシン

ヤク(案針役)、アマタレ(雨滴)、

以上の五八語である。当然、新語形の多く採られていることを期待したものの、案外にそれは少ない。アカガイル、アマガイルなどはそれぞれ、アカガヘル、アマガヘルの語形で他に項目のあるものである。してみると、これらの中には、いわば疑似増補語とも呼ぶべきものが、割に混入していると言える。ただ、これを積極的に解釈すれば、「和独」がより読者学生の便を慮って、なるだけ多くの語形を示そうとした、多項目主義の傾向を見ることが出来る。やはり、(F)型には編者のそれなりの意図が反映されているのである。

また、当然(F)の中には未だ明らかでないと言えない「和独」編者の語彙収集状況を窺わせる情報が含まれていると考えられる。

例えば、アヲタ(AO-TA)には(WEB)：俗語の注記があるが、この語を試みに日本国語大辞典で引くと興味深いことが分かる。

②京阪地方で、芝居、見世物などの興行物を料金を払わないで見ること。また、その人。：*浪花聞書「青田。芝居杯之無銭にて見るものを云。江戸で云油虫のことなり。

方言 興行物に料金を払わないで押し入って見る。福井

県敦賀⁴² 滋賀県甲賀郡616 大阪⁶⁷ 奈良県生駒郡竜田⁶⁸

即ち、「和独」のみが関西方言であるこの語を、俗語注記付きで新たに増補収載しているのである。又、アモ(AMO)も物類称呼に、

もち 和名もちひ 関西にてあもと云 江戸にては小児に対してあもといふ

とある。ここは小児語でなく、やはり関西の一般語が採用されると見るのが妥当であろう。アヘル(AYE-TU-TA)は

Kinô no kadze de ki-no-mi ga ayeta.

の用例文を載せている。上代から見える語であるが、日葡辞書^(註)には次のように記す。

Ave. uru. eta...下 (Ximo) では、果実や穀粒や小麦などがひとりでに落ちることに言い、または、その他どんな物でも高い所から落ちるのに言う。

又、日本国語大辞典で方言欄では

②おもに木の実・果実などが落ちる 兵庫県赤穂郡 鳥取県気

高郡707 山口764 徳島県805 対馬郡 大分県99

とある。これも、関西を含む西日本方言として考えることが出来る。

アヘギアヘギの同義語として「和独」が挙げている、SEKI-SEKIも方言形として、伊勢・三重県宇治山田・広島県・大分県日田郡に存し、同様の背景をもつ収載語である。

極く部分的な推察から、全体の性格は計り難いものがある。しかし、「和独」編集の際には少なくとも関西以西の俗語的な性格をもった語が新たに採用されている、という見通しを立てることが出来るのである。

但、一方ではアケツパンナシ (AKEPPANASHI) のように、特に (Umgspr. in Tokio) : 東京口頭語の注記を付して増補したのものも存する。(in Tokio) という断りの解釈が問題となってくるが、当時既にあらゆる面で国家の中心的性格をもつ東京地方の勢力が辞書収載語に反映されてくるのは至極当然なことである。それだけに、むしろアヲタ等の関西語系の進入は「和独」編集の性格として注目できるし、このAの部の増補語に於いては却って東京語系よりも関西語系が優勢に現われていることが、今後の「和独」研究に一つの課題を投げかけているように、思われるのである。

尚、アカイタ、アタマハゲ(同義語にNEE-BUTOを挙げる)など素性が興味深いものも残る。やはり、Aの部以外にも全体に互らねば「和独」語彙の性格はなかなか把み難い所がありそうである。

三——漢字見出しについて

「和独」に於ける漢字表示は旺盛である。Aの部全一〇〇一項目の中、漢字表示の無いものは、次のものを数えるだけであった。

アイ、アイアイ、アハレ、アハヤ、アレ、アイタ、アバ、

アレ、アラバ、アラジ、アラレタ、アラデアラメ、アラズンバ、

アラネバ、

アヲタ、アクドイ、アラキダ、アレガシ、アクル、アゲ(衣類関

係)、アゲクノハテニ

感動詞や俗語(句)形で漢字見出しを挙げていないのは分かるが、動詞「アリ」の活用句形に於いて示していないのは、不分明である。例えば「アンツルニ」の項には「案」字を示すなど、他の形容詞・形容動詞に於いても活用形で一項を立てる際には、必ずそれぞれ漢字表示を行っているだけに、単に作業の経済からとも捉え難い所である。

ともかく、「和独」で99・8%にのぼる漢字表示率のの中身を見てみると、あまりに常識的で平易な漢字遣いの箇所「和英」に一致するのは当然として、一方で「和英」と異なる表示となっているものについては「和独」編集の背景なり意識なりを窺わせる部分がありそうである。

まず、「和独」から見出しに立項したもの(ト・チ型)に付した漢字については既に示しておいた。とりわけ特殊な用字法は目立たないが、アイサウツカシ…無愛想、アトニジリ…後轢(逡巡)、ア

トシザル… 退却、アツチ… 彼地、アラレダマ… 散弾、アヤツリニ
ンギョ… 機関人形、等は編者の趣旨に依るものと見られる。この中、
二字漢語形には興味深いものがある。即ち、「和独」に於ける旺盛な
漢語表示意欲は、見出し語の大部分に音・訓正用法の漢字を当てる
一方で、部分的にはその用法を離れた独自の表示法を採っているよ
うなのである。

そして、それは当然ともいえようが、「和英」(Ⅱ版)に無表示の
部分で新たに漢語形を示した場合に多く見られる。例えば、Aの部
で今度は(ト)・(ヲ)型以外の箇所から、そのような場合を抜き出すと、
七七箇所が挙がる。その中、漢語表示で注目出来るようなものは次の
ように多く含まれるのである。

アイニク… 折悪、アバウ… 豫防、アバレモノ… 暴客、アベコベニ…
転倒、アドナイ… アドケナイ… 憐々、アフル… アフリ… 弄翅、ア
タケル… 暴破、アタフタ… 澤山、アダツポイ… 爽快、アダフダ…
輕側、アダメク… 偷安、アラタカ… 奇驗、アラシコ… 荒砲、アクガ
レル… 狂浮、アグネル… 飽倦、アヤ… 糸戯、アヤメル… 刀殺、アヤ
ス… 戲弄、アマヤカス… 縦横、アツケニトラレル… 驚赫、アブナ
ガル… 危難、アテコスリ… アテコスル… 暗指、アデナ… アデヤカ…
華麗、アキツポイ… 厭易、アセル… 湘卸、アセル… 急迫、アツケ
ナイ… 不満足、アガリヤシキ… 官没屋敷、アガリデンチ… 官没田
地、

このように、新規表示の場合ではかなり独特の用字法も見られる
のに対し、「和英」(Ⅱ版)で既に漢字表示のある場合に、更にそれ
を改めているものが一二〇数例存したが、同様に注目出来るのは次
のように挙げられる。(見出し語…「和英」Ⅱ版↓「和独」)

アワレサ… アワレミ… 隣↓隣間、アソビ… 遊↓遊楽、アナドリ…
侮↓侮謾、アラソヒ… 争↓争闘、アヤシサ… アヤシミ… 怪↓怪異、
アマヘル… 嬌↓狎戯、アザヤカニ… アザヤカナ… 粲↓鮮明(粲
然)、アユミ… 歩↓步行、

先の例と合わせてみると、「和独」の漢字見出し部には、その一部
に於いて二字漢語化の傾向を見出すことが出来る。決して大量に存
するわけではなく、また本書編集の主目的を思い起こせば、「和独」
が取り立てて漢字表示に趣向を凝らした辞書で無いことは明らかで
ある。それだけに、「和独」が増補改訂に独自性を發揮した箇所に
そうした傾向がより強く見られることは、当期一般の漢語意識を探
る上でも重要な示唆を与える。もちろん、それはこれらの漢語表記
一々の性格等を明らかにした上で成されねばならないし、何よりも先ず
Aの部のみでなく、「和独」全部の調査検討が必要となってくる所で
ある。

次に「和独」の漢字見出し部に於ける特色の一つに(一)付の複
数表示ということが挙げられる。これは「和英」には見られない現
象であるが、良く調べて見ると「和独」編者の意識が窺えて興味深
い。Aの部から例を示す。(カナ語形省略。傍線筆者)

合証文(合約)、相口(レ首)、相組(同伍)、相役(同僚)、相弟
子(同門)、適(天晴)、青菜(善)、仇口(渾口)、集汁(骨董羹)、
姉分(義姉)、穴冠(穴字頭)、穴藏(害)、現(著)、甘酒(醴)、
明方(曙方)、揚場(埠頭)、油皿(燈蓋)、朝開(朝朗)、淺間敷
(淺猿)、足取(跬歩)、危(浮雲)、

これらは、各例で傍線の語がそのまま「和英」Ⅱ版に見られる。
つまり「和独」編者はこの場合、それぞれ自分達の付した漢語形を

良しとして積極的に先行させたものと思われる。

ところが一方では、それと逆に、

合詞(暗号)、跡取(相續人)、仇(讐)、生(産)、厚皮面(鉄面皮)、熱物(羹)、顯(現)、荒波(怒濤)、雨水(潦)、上旬(結局)、滑虫(竹虱)、狂浮(懂)、當(的)、當所(正的)、當行(宛行)、當名(宛名)、朝起(晨起)、朝夕(旦暮)、朝明(旦開)、浅手(薄疵)、空家(空宅)、足止(禁足)、足輕(卒伍)、足半(短鞋)案内者(誘導者)、扱人(仲裁人)、陽(公)、荒方(大概)、荒積(概帥)、肖(類似)、荒金(鏤)

といった「和英」Ⅱ版の語形に付す形で、新語形を表示した場合もある。画一的に取り組んだ様子は見られない。

しかし、いづれにしても「和英」Ⅱ版を斟酌しての複数表示が原則であり、以上の他に複数表示例は、概ね次のような例に過ぎない。

(◇)中は「和英」Ⅱ版)

扱(和議) ↑〈和諭〉、油注子(油瓶) ↑〈注子〉、當行(宛行) ↑〈當合〉、油攪(榨) ↑〈油窄〉、未明(旦末) ↑〈朝未明〉、足疾(蹠) ↑〈足早〉、當圖(好機會) ↑〈ナシ〉、荒増(概略) ↑〈ナシ〉、荒(暴猛) ↑〈ナシ〉

結局、(一)付複数表示は、或は「和英」Ⅱ版に先行し、或は付随しながらも独自の語形を示した所では示す、という「和独」編者の意欲の現われであり、先述の新規漢語形表示に準ずる箇所として捉えることが出来るのである。

三一― その他

右のように見出し部について見てきたが、「和独」はそれ以外にも

資料的活用を今後に倣つ面が多い。いくつかをここに示すことにする。

先づ、語形に付される注記について見る。

Ungspr. (口頭語) は「和英」の coll と対応する。「和独」Aの部には一六語に付されるが、そのうち「和英」coll 注記との対応が全版に於いて(見出し項そのものの無い箇所は無視して) 成されているものは次のとおり。

アイニク、アラフ、アバイアフ、アツチ、アツタラ(可惜)、アツタラ、アクドイ、アンマリ、アバ、アツケラカン

*アナカンムリ、*アマダレ、*アケツバナシ、

*印の三語は見出し項自体が「和独」のみに収載されているものであり孤立的であるが、他の各語については、当期に於ける口頭語的性格が明らかとなってくる。

残りの語については、少し詳しく観察してみよう。まず、アタ

(丸)の注記は各資料で、

アタ 和英 I II 並 III

アタ (見出しナシ)/com.coll./gem.Ungspr./ (注記ナシ)

となっている。「和英」Ⅲ版では注記ナシということだが、「和英」Ⅱ版・「和独」では、「一般口頭語」としてあることから、この語形が無注記へと推移したとしてもさ程不自然とは言えない。

次の例、アブク(泡)について、

アブク coll./coll./Ungspr.in Tokio/ (注記ナシ)

これも「和英」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ版と見れば、アタと同様の背景が考えられそうである。但、ここでも in Tokio とあることに筆者は関心を抱く。先のアバ(感動詞)についても、実は

フバ (見出しナツ) / (com. coll.) used in parting with a child/Ungspr in Tokio

/com.coll.Used in speaking to children

と、「和独」と「和英」とでは同じ一つの語形への対応の仕方に差が生じて来ている。これはどう捉えたら良いものだろうか。

「和英」に於いてJ・C・ヘボンが採集整理した当期の言語は、「最も教養ある日本人」の発音表示に努めたり、第三版では東京府平民高橋五郎の助けを受けたりした事実を反映していると考えられる。又、ヘボンは神奈川・横浜で医者を生業ともしていた。当然、「和英」には、江戸語東京語を軸とする態度が存したと言ってよからう。そこに、「東京に於いて」とわざわざ断る必要がない素地も生じ得る。

それに対し、「和独」の校定者R・レーマンは明治三年から明治一二年まで京都で独語を主として教鞭をとっている。日本人著述者三人も断言は出来ないもの、おそらくはその講義に学んだと考えられる。これらの人の手になった「和独」が、関西語・西日本系言語を何らかの意味で背景にしていることは強ち否定することは出来ないし、「和英」より鋭敏に示された(in Tokio)の解釈もそれに拠ればより合理的に成されるのではないか。

その間の推察をさらに補強し説明するものが、ここでの最後の例アヤス(落)である。

アヤス (注記ナツ) / Ungspr. / (ト) 注記
「和英」Ⅲ版では(注記付きで、この語が書物・書簡中のみ用いられるか或は廃語であることを示すのに対し、「和独」では口頭語として扱うのである。アヤスは日葡辞書に、^(注10)

Avaxisu アヤシ、ス (ト) ぼし落アヤシ……ト (Ximo) では、果実などを地面へはたき落とす意

とあり、日本国語大辞典では方言の欄に、

②木の実などを落とす 兵庫県佐用郡60 岡山県76 山口県76

福岡県90 長崎県97 熊本県91 大分県97 鹿児島県99

と記す。少くとも西日本に於いて、「果実等を落とす」意に於いては、これまでに廃されることなく各地に保存された語であることは明らかである。そこでアヤスの項に挙げる用例を対照させてみると、先の推察はかなりの蓋然性をもってることが分かる。つまり、

「和英」Ⅰ版・チヲアヤス、

「和英」Ⅱ版・チヲアヤス、ハレモノヲア

ヤス

「和英」Ⅲ版・チヲアヤス、ハレモノヲア

ヤス

「和独」…リンゴヲアヤス

のように、「和英」で挙げるアヤスの例文を編者の意図によって取り代え、自らの体得した言語体系内に引きずり込んだ上で、Ungspr.の注記を付しているのである。これらは、「和英」の非西日本語系の傾向を示唆すると同時に、「和独」編者に東京語東日本語系の背景を想定したのでは説明のつかない現象であろう。先の「アヲタ」「アヘル」等の語彙収載に際しての見通しも又、ここでの事実と相俟って、さらにその蓋然性を高めることになる。

尚、上記のもの他、Ungspr.は口頭語的でない見出し語形に於いて、その口頭語形を示す為にも用いられる。Aの部では次のとおり。
アラジ↓アルマイ・ナカロー、アキビト↓アキンド、アラネバ↓

ナケレバ

これらも含め、他の注記(vulg. 俗語、ungebet. 廢語)に於いてもまだ資料的検討を「和独」全般に亙り行う必要があるが、今回は省略する。

次に、幾らか既に例を示したが、日本語例文部に於いて、序文⑦の方針のように「和英」に無いものを増補したり、部分的・全面的な差し替えを行った箇所が割に見られる。例えば、アルの項を見る^{と下のように対照される。(下線筆者)}

下線部が改廃・増補した部分であるが、全く同じ例文は、僅かにアッタカの一句に過ぎない。又、「和独」で新たに増補された部分のかなり日常語的であることが注目出来よう。

この他、例文部では敬語表現、語彙対立といったものについても現在調査を進めている所であり、詳しい検討考察は次の発表機会に譲りたい。

四 むすび

従来、本書の利用があまり活発とはいえなかったのは、「和独」は「和英」の形式のみならずその内容及ぶまで模倣踏襲されたものである、との考え方が多少とも存していたからではなからうか。本稿は、大勢に於ける「和英」の影響を「和独」編者が或る部分に於いては、それを廃し全く独自の言語意識と判断とに支えられた増補改変を行った事実を指摘することに重点を置いた。

そして「和英」との比較検討の結果、或る程度「和独」の言語資料的性格を明らかにすることが出来、かつ又研究利用上の有効性についても示し得たように思う。もちろん、細部の状況から余りに全般的

「和英」Ⅱ版

アルカナイカワカリマセン

コノコトホンニアル

セカイニアルモノ

アッタカ

アッテモヨイ

コノサカナハドクガアル

クワシクカイテアル

タレアリティノチラステルモノナン

「和独」

—カナイカゾンジマセン

コノコトワホンニ—カ

セケンニ—モノ

アッタカ

—タケモツテオイデ

モチットアリソウナモンダ

キノウマデハタクサンアリマシタガ

モウナニモゴザイマセン

タレアッテユクモノナン

な推察に走りすぎたきらいが無いわけでもないが、それはこれからの調査の進展により順次立証され、或は修正されて行くこととなる。

今回は、見出し項目部の検討に重点を置いた為、むしろ当期の口語資料としての活用が期待される日本語例文部については余り触れる所が無く、又量的にもAの部だけという限定されたものとなってしまう。今回調査の及ばなかったこうした範囲については、現在の調査を早急に押し進めて行きたいと思う。

更に、「和独」の成立上の特色から、「和英」との比較研究が緊急かつ重要な要件となることは言を俟たぬが、独逸学資料としての本来的な研究も又、同様に一つの重要な課題として今後に残る。或は一方で、独逸学資料・英学資料また仏学資料といった洋学資料を、対訳辞書なら対訳辞書という一観点を軸に広く捉え直して見る立場も、有って良いと思われる。幸い、本学英文科には、豊田実博士の収集された貴重な洋学資料が蔵される。現在、そうした観点から、次のような辞書群につき、鋭意調査中である。「字和袖珍字書」(明5)、『Deutsch-Japanisches Wörterbuch (独和薩摩辞書)』(明6)、『改訂増補英和对訳袖珍辞書』(慶応2)、『和訳英辞書』(明2)、『大正増補和訳英辞林』(明4)、また「官許仏和辞典」(明4)等。これらについてもいずれ発表の機会を得たい。

以上、諸々の課題を後日の検討に俟つ大抵みな論稿となったが、当面「和独」全般に互る資料的解明を目指して行きたいと思う。

注

注1 和英語林集成Ⅱ版は明治五(一八七二)年、Ⅲ版は明治一九(一八八

六) 年刊。和独対訳辞林は明治十(一八七七) 年刊。

注2 飛田良文氏が『東京語の連母音「ア・ウ」の成立——「和英語林集成を中心として——』(国語学研究一)、『東京語の連母音「オ・ウ」の成立——和英語林集成を中心として——』(国語と国文学一八)の両論文中で本書を「和英語林集成」と同等の価値をもつ資料として使える見通しを示されている。

注3 序文を訳すにあたっては学友山崎純君の協力を得た。記して謝す。

注4 厳密に言えば、「和英」・和英の部との比較である。「和独」には、「和英」英和の部に相当するものは存しない。

注5 違いの主なものを示す。「和独」——「和英」Ⅱ版)ち: TSI—CHIR
を: D2A—2A'、ち: DIH—IR、せ: DZE—ZE、を: DZO—ZO

注6 本稿中の「和英」見出し語数のデータは、特に断らない限り松村明氏が「和英語林集成」(昭五五・講談社学術文庫)の解説に於いて示された数値を、そのまま使わせていただいた。尚、表中*印の数値は、ローマ字つづり方式の違いの影響を特に被っているものであるが、そのまま挙げておいた。因みに、「和独」の数値は「和英」Ⅱ版のつづり方式で換算すると、C: 四五六、D: 五二五、T: 二二六三、Z: 三三五六、等となる。

又「和英」Ⅰ版追加部の一〇六語は、それぞれ当該の項目に算入しておいた。

注7 カナ見出しの誤か。本稿の例は、見出し部はカナ見出しで挙げ、例文部ではローマ字をカナに改めて示した。又、漢字は適宜現行字体に直した。

注8 松村氏の数値による。但し、これにはⅠ版にありながらⅡ版で廃された場合も含むので純然たる増補とはいえない。

注9 「邦訳日葡辞書」(岩波書店)

注10 同右

注11 日本国語大辞典でアヤスは、①血や汗などをしたたらす、②果実などを落とす、とあり、「和英」が①を挙げたのに対し、「和独」が②に改変した訳である。